

人型への眼差し 造型美術にみる”肥満”と”痩せ”(2) ： 後期旧石器時代の彫刻美術(II)

佐々木, 悠
九州大学健康科学センター

熊谷, 秋三
九州大学健康科学センター, 九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/24716>

出版情報：健康科学. 34, pp.69-74, 2012-03-30. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：



—研究資料—

人型への眼差し
造型美術にみる“肥満”と“痩せ”(2)
—後期旧石器時代の彫像美術(II)—

佐々木 悠^{1)*}, 熊谷秋三^{1,2)}

A Look at Human Body Structure,
Obesity and Thinness in Fine Art (2)
—Figurative arts in Upper Paleolithic Stone Age (II)—

Haruka SASAKI, MD, PhD^{1)*}, Shuzo KUMAGAI, PhD¹⁾²⁾

(Journal of Health Science, Kyushu University, 34: 69-74, 2012)

人類は古代より“ヒトのかたち(人型)”に限りなく惹かれてやまない存在であったに違いない。そのことは数万年前の先史時代からメタファーとしての人像が人類の営為のなかで数多く残されていることで理解できる。

後期旧石器時代の丸彫り女性裸像は、男女の判別が困難な像や細工が稚拙なものを含めると、ユーラシア大陸の広大な地域に分布し、約 200 体近くが出土している(図 1)¹⁻³⁾。なかでも中心的地域である東欧やイタリアは、“グラヴィエット文化(Gravettian)”, フランスでは“ペリゴール文化(Perigordien)” (別称グラヴィエット文化)^{*1}と深く結びついている。多くの小像の創作年代は後期旧石器時代(BC 30000-12000)に集中し、一般的には豊満な体型が印象づけられているが、全ての人像が今日いう肥満型を示している訳ではない。明らかに痩せと思われる裸像も少なくない(特にシベリア, マルタ出土など)^{1-3,6)}。Duhard JP¹²⁾は個々の人型彫像を検討し、異なる自然環境, 生活スタイル, 食料資源の相違が強く影響しているとはいえ、現代ヨーロッパ女性にも認められ、種々の臀部の形態を中心に類型化で

きるとしている。本論考中でも「ヴィーナス」^{*2}なる名称を慣例のごとく繁用したが、そもそも、この名称は、1864 年ロージェリー・バス(仏)で発見された頭部, 腕, 乳房もなく、性器のみが強調された小像に対し、皮肉をこめて“淫らなヴィーナス(immodest venus)” (図 5A)と呼ばれたことに端を発し、それ以降先史学者の間でも自然と使用されるようになった。しかし、この総称は“母”という普遍的な第一原理を矮小化するもので単なる“ニック・ネーム”にすぎないとして反対する学者も少なくない^{3,6)}。

代表的なヴィーナス像数例を提示してみたい(図 2A-D)。

レスピュークのヴィーナス(Lespugue Venus) (図 2A&3)は、フランス、ピレネー山脈の麓にあるガロン県、レスピューク洞窟で発見されたマンモスの牙製、高さ 14.7cm の彫像である。原型は発掘中に破損され、図 3 は復元されたものである。乳房は大きく垂れ下がり、腹部を覆い腰の部位まで達し、あたかも二つの乳房を細い腕で隠しているかのようにも見える。異常に大きな臀部は脂肪臀 (steatopygia, ステアトパイジア)^{*3}

1) 九州大学健康科学センター, Institute of Health Science, Kyushu University, Kasuga, Japan

2) 九州大学大学院人間環境学府, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, Kasuga, Japan,

*Corresponding author. 1-2-6-1202 Momochihama, Sawaraku, Fukuoka City, 814-0001, Japan.

Tel. & fax: +81 92 822 1735. Email address: haruka-s@mx3.canvas.net.jp (H. Sasaki)

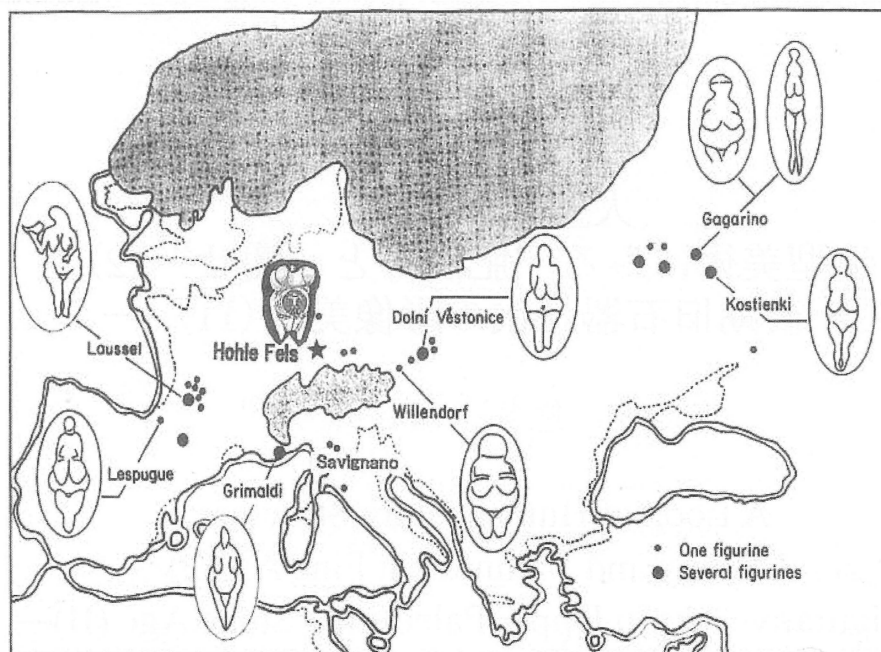


図1. ヴィーナス像発見の分布図

旧石器時代当時（実線）と現在の海岸線と氷床（点付き斜線）で覆われた地域

（文献 11, Bray GA, 2004 を改変）

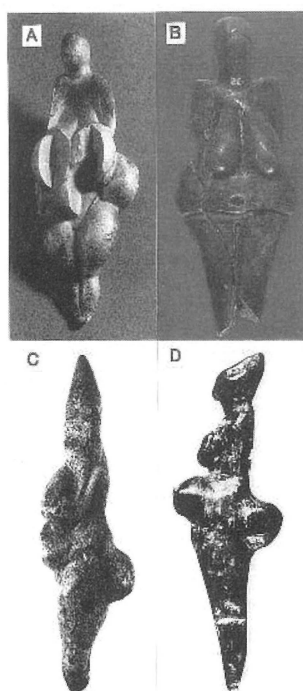


図2. A：“レスピュークのヴィーナス”，フランス，ガロニヌ県レスピューク出土，マンモス牙製，高さ 14.7 cm，ベルゴール期，パリ，人類博物館

B：“ドルニ・ヴェストニツのヴィーナス”，旧チェコスロバキア，ドルニ・ヴィエストニツ・出土，テラコッタ（セラミック製），高さ 11.5 cm，オリニャック期(BC 25000-20000)，ブルノ，モラヴィア博物館

C：“サヴィニャーノのヴィーナス”，イタリア，サルヴィニャーノ・ルズパナロ出土，蛇紋岩，高さ 22.0 cm，オーリニャック期(BC 3500-22000)，ローマ，民族博物館

D：“グリマルディのヴィーナス”，フランス，グリマルディ出土，凍石製，高さ 6.1 cm，オーリニャック期，フランス，サン・ジェルマン・アン・レー国立古代博物館

と呼ばれアフリカ起源のブッシュマン，ホッテントット族など関連し民族的な特徴とされた時期もあるが³⁾(図 4)，現在は否定的であり，エネルギー蓄積，側面観を強調した像とされている²⁾，巨乳に関しては図像学的に病的な“massive breast hypertrophy”⁵⁾とする説も

ある。抽象的に肉体を処理し，現代彫刻にも通じる朔像であり，身体各部位は異常に大きな造形美で表現されている。また小さな頭部はやや下方に付き，両脚は細く足先はない。前腕も細く粗略に描かれている。ただ臀部下から膝裏にかけて 10 本の縦線が走っており，

先細りの下肢の流れを美的に表し、妊婦像とも関連づけ“羊水”の流れ⁶⁾、スカート、エプロン様のものを表すとする説もある³⁾。肉体をこれだけデフォルメし得る作者が顔貌を描く力量がなかったとは考え難く、肖像としての意義はなく、多産、繁栄、豊饒のシンボルとして抽象的に創作されたものであろう。一方、ヴィーレンドルフの小像と同様に表面がスムーズに磨かれ、手掌内に快く収まることから何らかの性の側面を表す玩具（初夜教育の道具）であったと、大胆な推察をする学者もある⁵⁾。

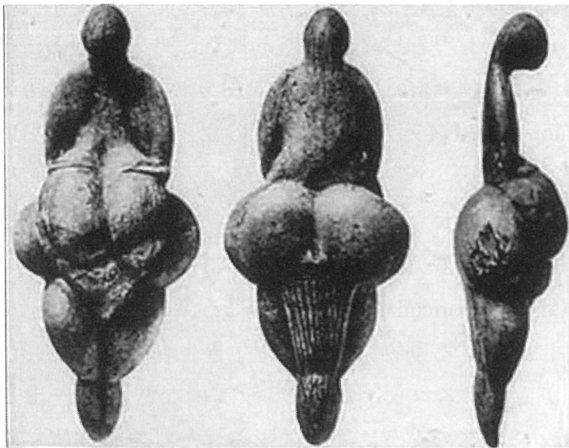


図3: “レスピュークのヴィーナス”の再構成像 (文献3より)



図4: 脂肪臀症 (steatopygia) (Religion before Adam; <http://www.lost-history.com/adam.php> より)

ドルニ・ヴェストニツエのヴィーナス(Venus of Dolni Vestonice ; 別名 Black venus, 図2B)は、セラミック製(陶製粘土とマンモス骨灰の混合)、旧チェコスロバキアのドルニ・ヴェストニツエ遺跡の住居址で

多数の骨片、フリント石器など複数の焼成粘土像の一つとして発見された(1925)。巨大な乳房、腕は短く、両脚は太く2つに分かれおり、性門ははっきりと描かれていない。また稀な描写であるが顔面には小さな眼、鼻が刻まれている^{3,6)}(例外的に明確な顔貌と髪型が繊細かつ写實的に造作された“オーリニアク文化に属する“ブラッサムプーイのヴィーナス”がある)(図5B)、腹部と下肢の間には分離されており2つの素焼器を結合されたものか、腰紐(帯)ようにも見て取れる。同遺跡には動物の粘土模型を焼くための“窯”も見出され、この小像は粘土を使用した世界最古の素焼き製の彫像(テラコッタ; Terra cotta 伊)^{*6)}とされ注目されている⁴⁾。

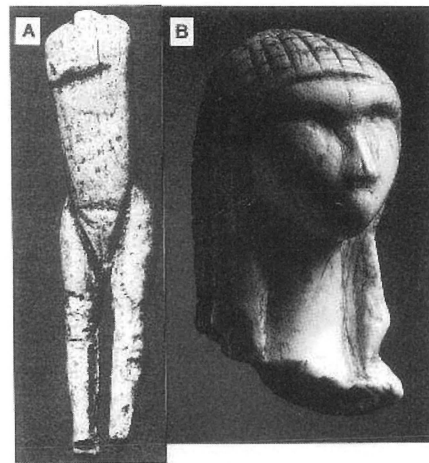


図5. A: “淫猥のヴィーナス”, フランス, ロージュリー・バス出土, 象牙, 高さ 7.8cm, パリ人類博物館(体系世界の美術1, 学習研究社, 1973より)

B: “ブラッサムプーイのヴィーナス”, フランス, ランド県ブラッサプーイ出土, 象牙, 高さ 3.7cm, (2万5000年前), サン・ジェルマン・アン・レー国立古代博物館(現生人類の起源, 東京化学同人, 1999より)

ローセルのヴィーナス(Venus of Laussel, 別称; 角杯を捧げる女)(図6)は、オーリニアク・ペルゴール期を代表する、最も知られるレリーフ像である。ラスコーに程近いドルドーニュエのローセル岩陰遺跡(洞窟入口の“聖処”^{*5)}と呼ばれる場所)で、精神科医JG ラランヌ(Lalanne)によって発見された(1911)。岩壁を素材とした板石浮彫が特徴であり、石灰岩製の高さ43cm, 旧石器時代後期(BC 20000-18000)のものと考えられる。豊かな曲線を示し、我々の視線を引きつけてやまないものがある。Y字型に描かれた太い大腿に比し

下肢は小さく、豊満な乳房、陰門など性的特徴が誇張されている。右手は豊饒の角（バイソン）を掲げ、左腕は男性を導くかのごとく腹部（子宮）に添えられている。右手に掲げる三日月型の角の意味付けに関しては、現在なお種々議論がある³⁾。角の表面には、はっきりした13のノッチを認め、月経周期か、月経13日目の排卵日を示すとする説、出産の呪術に関連するとする説、太陰暦に基づく13回の月の満ち欠け（満月）を表すとする説などの他、角笛、あるいは角杯（当時の発酵性アルコール、獣油を満たす容器）であり、初期の物質文化の現れを示すものとするなどである¹⁻³⁾。いずれにしても、手・足、顔貌の細部が造作されていない点では、他のオーリニアク期（ペルゴール）の丸彫裸像と共通している。同洞窟からは、他の数体の女性像に加え男性と思われる像も一緒に出土している。このことは稀なことであり、その解釈には一考を要すると思われる。



図6：“ローセルのヴィーナス”，
フランス，ドルゴース，ローセル岩陰遺跡出土，
石灰岩製，高さ43 cm，グラヴィエット（ペル
ゴール）期（BC 20000-18000），フランス，ボル
ドー，アキテーヌ博物館

サヴィニャーノのヴィーナス(Venus of Savignano ; 図2C)は蛇紋岩製，高さ22.1cmと小像のなかで最も大きく，イタリア北東部，サヴィニャーノ遺跡より建設工事中の労働者によって偶然発見された。後期オーリニアク文化に属する，ネアンデルタール人の創作と考えられる（BC 35000-27000）。ズキンを被ったような独特の頭部（髪型？）を示し，乳房は突出し，腹部は

大きく，大腿部は豊満に描かれている。頭部と下肢は尖った形で，顔貌の細部は表現されていない。明らかに女性像でありながら男女を超越した塑像で，両端の先細りしたフォルムは一見“男根”を暗示させ，“両性有具(double phallus)”とも解釈される³⁾。

グリマルディのヴィーナス(Venus of Grimaldi, 別称；操り人形；図2D)はフランス，マントンに近接のグリマルディ洞穴でやはり労働者により発見され，オーリニアク・ペルゴール後期に属すると考えられているが，どの地層から出土したかは判明していない。高さ4.7 cm，凍石（ステアタイト）に彫刻され，足が細く，背が高い一見“痩せ”像に見てとれる。一方，側面像では，臀部は肢体から突き出ておりいわゆる脂肪臀(steatopygia)，ステアトパイジアのヴィーナス像ともいえる（図4）。

旧石器時代の美術は，ヴィーナス群（動産美術）の他，「洞窟壁画(Parietal art)」といわれる深い洞窟の岩壁や天井に躍動する動物群の生態を生き生きと描いた彩色画，刻画（ラスコー，アルタミラ美術など），ローセルのヴィーナスのように岩盤に彫られた「岩陰浮彫」が存在する。これら遺跡美術はフランス西南部，スペイン北部に集中していることより，一括して旧石器時代の美術を『フランク・カンタブリア美術(Franco-Cantabrian Art)』と総称される^{1,2)}。これらの小像群は創作課程，素材・原料の相違，時間的，地理的にも広い範囲に分布しており，個々の人像を眺めてみると極めてヘテロな集団である。したがって，その創作意図（モチベーション&モチーフ）や背景を単一要因に求めることは困難と思われる^{3,4,6,7)}。しかし，それら一群のデザインやフォルムには，極めて類似した共通性が認められる⁸⁾。ヴィーランドルフ像でも述べたごとく造形的にも正面観を強調したタイプと側面観を重視したタイプ（脂肪臀など）など，すでに立体描写が取り入れられ観察者，作者の視点が強く意識されているように思われる。Gamble⁸⁾は，図7に示すごとく腹部と性門は，同心円（円弧）に収まり，他の頭部や下肢は徐々に縮小し，直線的な先細り形態を示していることを指摘，これらの幾何学的な類似性は，当時の狩猟採取社会における集団間に共通する精神構造の連続性(conceptual framework, visual communication)，あるいはネットワーク（交易など）が存在していたことを示唆するとしている。青柳¹⁾は正面像，側面像ともに上半身と下半身の輪郭が鋭角二等辺三角形によって構

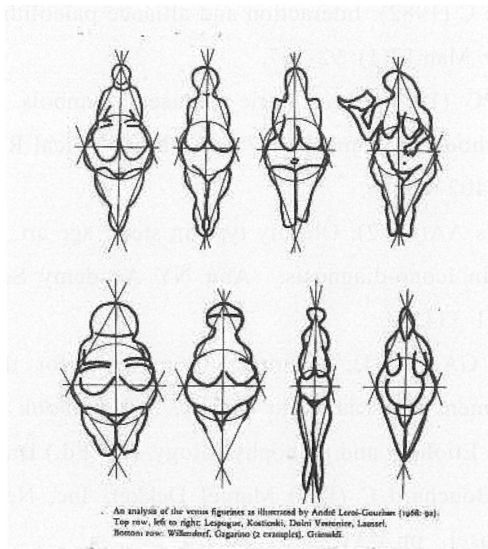


図7：ヴィーナスに認めるフォルムとデザインの類似性。上段：Lespugue, Kogtjenki, Dolni Vestorice, Laussel, 下段：Willendorf, Gagarine(2 体), Grimaldi 各出土(文献 8, Camble C., 1982 より)

成されており、当時重要かつ万能の道具として使用されていた握釜（ハンド・アックス；石核石器，打製石器の一種）のタイプが人体の造作に影響していると推定している（図 8）。

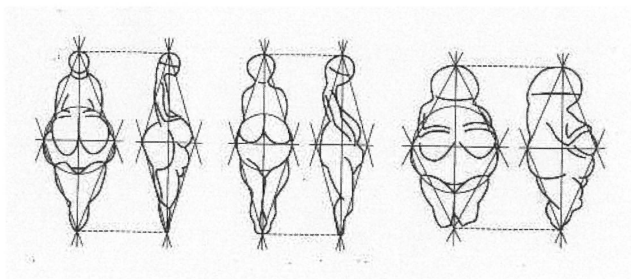


図 8：正面・側面像に於いても共通する一定の造型法がある（左より Lespugue, Kostienki, Willendorf 各出土）(文献 1, 青柳：人類文明の黎明と暮れ方，講談社，2009, P.83 より)

一方，Rice⁷⁾は，多数の小像の体型を検討し，生殖可能な幅広い年齢層（生殖前期〔思春期〕，生殖期〔妊娠，非妊娠〕，後生殖期）が造型されていることを指摘，単に妊娠・出産に基づく母性表現(mother-hood, mother goddess)ではなく，むしろ小集団における食糧の採取者，供給者，連帯意識のシンボルとしての女性，即ち広義の女性性(woman・hood)，女神(goddess)，*⁴を表現していると強調している（無論，生命に関する人類最初の表象は“母”である母神話を重視する学者も少なくない

6)。一方，Pontius¹⁰⁾は，64 体を図像学的に分析，75% が肥満体型を呈し，更に腹部型(abdominal type)と臀部型(gluteal type)に分類すると，その 85%が臀部型(下半身，西洋梨型肥満)に属するとしている。今日の脂肪分布 (body fat distribution)と種々疾患との関連，アディポサイトカイン，代謝調節に関連する多くの知見¹³⁾を考慮すると先史時代に，かかる臀部・下半身肥満(Vague のいう gynoid adiposity)が生存やエネルギー蓄積，出産，授乳などに有利な“健康美”であることを本能的に知っていたのであろうか？“根源的な生命への憧れ”の所産として，これらの人像が創作されたとすれば，20 世紀の肥満研究者，Vague J (1947)，Kissebah AH (1982)，Björntrop P (1985)，松澤 (1992)；(ヴィレンドルフ賞：国際肥満学会賞)¹⁴⁾の数々の業績よりも数万年前のことであり，驚嘆に値することように思われる。

脚 注

*1：ヨーロッパでは後期旧石器時代の文化的下位区分としてオーリニャック期，グラヴェット期（ペルゴール後期），ソリュートレ期，マドレーヌ期に分類している。洪積世，氷河期，氷河後期に相当する。

*2：“ステレオパイジアのヴィーナス”と呼ばれることあり。日本の土偶にも認められるとの報告あり(Hudson MJ et al:Anthropol. Sci.116: 87, 2008)。

*3：石器時代からはじめられ，粘土で作られた素焼の塑像，皿，壺などの器物，瓦の総称。

*4：宗教的な祭祀や儀礼を行う場所。

*5：ヴィーナスはローマ神話の豊饒の女神に，ギリシャ神話ではアフロディテー，愛と美の女神の性格を有する。

**：写真，所蔵は世界美術大全集(1995，小学館)，体系世界の美術(1973,学習研究社)などを参考にした。

参考文献

- 1) 青柳正規(1995): 人類最古の美術, 世界美術大全集 1 巻 (編集; 青柳正規, 大貫良夫), 小学館, pp.9-23/56-64
- 2) 木村重信(1973): ユーラシアの旧石器時代美術, 体系世界の美術, 第1巻—先史・アフリカ・オセアニア美術, 学習研究社, pp. 64-76.
- 3) Jannett KD: Female figurines of the upper Paleolithic. University Honors Program, Paper 74. (2008). <http://ecommons.txstate.edu/honorprog/74>
- 4) マーガレット・エーレンバーグ (河合信和訳) (1997): 先史時代の女性; ジェンダー考古学事始め, 河出書房新社, pp.52-56/100-117. (前出)
- 5) Harding JR (1976): Certain upper Paleolithic 'venus' statuettes considered in relation to the pathological condition known as massive hypertrophy of the breasts. *Man New Series* 11(2): 271-272.
- 6) アン・ベアリング, ジュールズ・キャシュフオード (森雅子訳(2007): 序文, はじまり, 旧石器時代の母神, 世界女神大全--原初的女神からギリシャ神話まで--, 原書房, 2007, 序文, pp.2-14.
- 7) リチャード・ラジリー (安原和見訳): 第14章 ヴィーナス小像-性欲の対象かシンボルか, 石器時代文明の驚異, 河出書房新社, 1999, P.263-284. (前出)
- 8) Gamble C (1982): Interaction and alliance paleolithic society. *Man* 17(1): 92-107.
- 9) Rice PC (1981): Prehistoric venuses: Symbols of motherhood or womanhood? *J. Anthropological Res* 37(4): 402-414.
- 10) Pontius AA(1982): Obesity type in stone age art: A study in icono-diagnosis. *Ann NY Academy Sci*: 499:331-334.
- 11) Bray GA (2004): Historical framework for the development of ideas about obesity. In *Handbook of Obesity, Etiology and pathophysiology*. (2nd Ed.) Bray GA & Bouchard C (Eds) Marcel Dekker, Inc. New York, Basel, pp.1-31.
- 12) Duhard JP (1991): The shape of Pleistocene women, *Antiquity* 65(248): 552-566.
- 13) 池田義雄編(2011): 肥満の医学, 日本評論社, 東京, pp.193..
- 14) 徳永勝一(2007): ヴィレンドルフ賞歴代受賞者の業績と思い出, 肥満研究, 13(1):117-121.